いちご「とちおとめ」の作型適応性

1．試験のねらい

とちおとめは大果で食味が良いなどの優れた特性を有することから、今後広く普及が見込まれる。そこで現在女峰で行われている主要な作型での適応性を明らかにする。

2．試験方法

品種はとちおとめと女峰を供試した。作型は早期夜冷育苗（採苗６月25日、夜冷処理８月１日、定植８月29日）、普通夜冷育苗（採苗７月17日、夜冷処理８月20日、定植９月11日）、低温暗黒育苗（採苗７月５日、低温処理８月25日、定植９月11日）、ポット育苗（採苗７月５日、定植９月13日）、高冷地育苗（７月20日採苗・高冷地へ仮植、定植９月13日）の６作型とし、開花、収量性など促成栽培での適応性について検討した。

3．試験結果及び考察

(1) 定植時の株は早期夜冷、低温暗黒でやや大きかった。女峰との比較では高冷地でとちおとめの株がかなり小さかった。定植後の生育は、10月では早期夜冷が特に旺盛であったのに対して、高冷地ではやや抑えられた。また女峰に比べていずれの作型でもとちおとめの葉柄長は短かった。11月では、10月に比べて葉柄長、葉面積とも減少し、高冷地で特に生育が劣った。

(2) 頂花房の開花及び収穫始期は、早期夜冷、高冷地、普通夜冷、低温暗黒、ポットの順に早かったが、高冷地ではかなり早期に開花した株がみられた。また女峰との比較では高冷地以外は大きな差は認められなかった。頂花房の着花数は、早期夜冷、ポット、低温暗黒、普通夜冷、高冷地の順に多かったが、いずれの作型とも女峰より少なかった。第１次腋花房の開花及び収穫始期は、早期夜冷、高冷地、普通夜冷、低温暗黒、ポットの順に早く、頂花房の早晩の傾向とは異なった。また女峰に比べると低温暗黒、高冷地でやや早かったのに対して、早期夜冷、普通夜冷、ポットでは遅れ、特に普通夜冷でその差が大きかった。第２次腋花房の収穫始期は、普通夜冷、低温暗黒でやや遅れた（表－１）。

(3) 収量は、早期夜冷が902ｇ／株で特に多収で、普通夜冷、低温暗黒も700ｇ／株を超えた。ポット、高冷地ではやや低収であったが、高冷地は生育が不揃いでやや劣ったことが影響したものと思われる。女峰との比較では、低温暗黒、高冷地でとちおとめの方が低収であったが、低温暗黒では大きな差ではなかった。等級別の発生の割合は、早期夜冷、高冷地で25ｇ以上の割合がやや低かったが、いずれの作型でも女峰より上位等級の発生率が高かった（表－２）。

(4) 乱形果の発生はいずれの作型とも女峰より多く、等級別に発生をみるといずれの作型でも25ｇ以上の割合で50％以上の発生率であった（データ省略）。

4．成果の要約

とちおとめはいずれの作型でも収穫始期が女峰とほぼ同様で、腋花房の収穫始期が遅れるものの女峰より果実が大果で上位等級の発生も極めて高いことが明らかとなった。収量は、早期夜冷、普通夜冷、ポットでは女峰よりも多収で、特に早期夜冷は収量が極めて多かった。低温暗黒では女峰よりやや低収となったが普通夜冷と同程度の収量であり、これらの作型の適応性は女峰と同等以上に高いものと考えられた。また高冷地はポットと同程度の収量であったが、生育の不揃い、開花のばらつきなどがみられたことから、育苗法についてさらに検討が必要と考えられる。

（担当者　栃木分場　植木正明）

表－1　作型の相違が生育、開花、収穫始期及び着花数に及ぼす影響

作型	品種	10月19日		頂花房		第1次腋花房		第2次腋花房	頂花房着花数
		葉柄長 cm	葉面積[1] cm²	開花始 月．日	収穫始 月．日	開花始 月．日	収穫始 月．日	収穫始 月．日	花／株
早期夜冷	とちおとめ	13.9	91.0	10．7	11．7	11.18	12.26	3．4	17.5
	女峰	15.1	93.0	10．9	11.10	11.13	12.20	2.28	20.4
普通夜冷	とちおとめ	11.8	92.4	10.23	11.20	12．6	1.14	3.11	12.0
	女峰	12.5	83.7	10.23	11.20	11.22	12.29	3．8	17.3
低温暗黒	とちおとめ	11.8	97.0	10.23	11.20	12．8	1.16	3.10	13.7
	女峰	13.9	96.3	10.21	11.18	12.10	1.20	3.11	16.8
ポット	とちおとめ	11.7	90.5	10.27	11.27	12.11	1.18	3．3	16.0
	女峰	12.1	87.7	10.28	11.27	12．9	1.14	3.19	19.8
高冷地	とちおとめ	9.7	69.3	10.11	11.11	11.26	1．4	3．4	11.8
	女峰	13.5	88.0	10.28	11.22	11.27	1．6	3．2	16.3

注1）葉面積は小葉の葉身×葉幅

表－2　作型の相違が可販果収量に及ぼす影響

作型	品種	8g以上の可販果収量 g／株					等級別発生果割合 %			
		頂花房	1次腋	2次腋	合計	1果重	25g≧	13g≧	8g≧	8g＜[1]
早期夜冷	とちおとめ	231	331	340	902	16.8	9.3	36.2	30.5	24.0
	女峰	145	295	271	711	14.5	4.0	23.8	31.1	41.1
普通夜冷	とちおとめ	178	281	253	713	18.0	13.8	34.1	28.9	23.2
	女峰	138	260	217	615	14.7	4.1	24.0	28.2	43.7
低温暗黒	とちおとめ	215	260	230	705	18.2	13.8	36.9	25.9	23.4
	女峰	161	325	235	720	15.5	5.7	30.3	27.2	36.8
ポット	とちおとめ	213	217	173	602	17.2	10.6	35.7	25.8	27.9
	女峰	173	213	189	575	14.2	3.4	27.0	29.7	39.9
高冷地	とちおとめ	138	230	252	620	16.2	7.6	34.7	28.8	28.9
	女峰	150	278	245	672	14.7	3.2	25.4	30.3	41.1

注1）等級は25g以上、13g以上25g未満、8g以上13g未満、8g未満の4等級とした。